

佐賀平野の水草の現状と課題

上赤博文

西九州大学子ども学部子ども学科

九州北部には筑紫平野と呼ばれる沖積平野があるが、筑後川よりも東側を特に佐賀平野と呼んでいる。東西 55km, 南北 22km, 面積は約 700km² で、佐賀県の面積の約 1/3 を占めている。筑後川以外にも、福岡県境の脊振山系、長崎県境の多良山系に端を発するいくつかの河川が有明海に流れ込み、それを横につなぐ灌漑用水路であるクリークが網の目のように張り巡らされている。クリークの長さは総延長 2000km と言われている。多様な水辺環境を持ち、水草相、淡水魚相、トンボ相は全国屈指の多様性を誇っている。

その中でも淡水魚相は特筆すべきものがあり、ニッポンバラタナゴ（アイソザイム分析から純系と分かっている）、カゼトゲタナゴ、カネヒラ、アブラボテ、ヤリタナゴなどのタナゴ類の他、ヤマノカミ、オヤニラミ、アリアケギバチ、カワバタモロコなど貴重なものが多い。メダカもまだ普通に生息している。しかしながら、全国の他の水系と同様、オオクチバス、ブルーギル、カダヤシ、タイリクバラタナゴなどの外来種の侵入もあり、特に改修されて水通しが良くなったクリークでは、急激な淡水魚相の変化が起こっている。トンボ相では、ギンヤンマ、チョウトンボ、ベニイトンボ、ネアカヨシヤンマのような止水性のトンボから、ニシカワトンボ、アオハダトンボ、ホンサナエ、キイロサナエのような流水性のトンボまで沢山の種類が確認されている。

水草相は飛び抜けて豊かであり、ヒシモドキ、オニバス、オグラコウホネ、ヒメコウホネ、アサザ、ガガブタ、デンジソウ、アカウキクサ、サンショウモ、ミズワラビ、トチカガミ、セキショウモ、センニンモ、オニビシ、コオニビシ、ヒメビシ、ナガエミクリ、ドクゼリなど、佐賀平野のため池、クリーク、河川、水路は絶滅危惧種がモザイク状に散らばっている。

しかし、これらのうちサンショウモとヒメビシは最近5年ほどの間に消滅してしまい、トチカガミ、アカウキクサ、デンジソウも絶滅寸前である。トチカガミは5年ほど前まではごく普通に見られていたが、急速に消え始めている。以前は遠目にはホテイアオイの群生かと思えるほどの集団もあったが、今年見たのは小集団3カ所のみである。近年新しく使われるようになった除草剤のどれかが効いている可能性がある（角野私信）。サンショウモとアカウキクサもおそらく除草剤と思われる。デンジソウは除草剤のほか遷移の進行が影響する。水路改修によって除去され、完全になくなったと思われたコンクリート水路に孢子から復活し、土砂の堆積と共に猛烈に繁殖をした。しかしながらその後、一切の除草作業が行われなかったため、他の植物との競争に敗れ再び消滅した。ヒシモドキの消長も激しく、消える水辺と増える水辺がモザイク状に存在する。これにも、地盤の攪乱が関係しているように思われる。オニバスは過去10年間に10カ所以上で発生しているが、毎年発生するのは川掃除で底質が攪乱される場所である。

逆に増えすぎて問題を起しているのがアサザである。佐賀平野の一角に生育していた集団が、圃場整備の後に爆発的に拡がり農業被害を出している。県や市の環境課から希少種であるため配慮してほしいと言われているようであるが、この集団は花を付けにくい系統である（演者は見たことがない）ため、地域農民からはうっとうしい水草として嫌われているようである。また、ホテイアオイ、オオフサモ、アゾラ等の外来水草の被害も随所に見られ、過去にはボタンウキクサが猛繁殖をしたクリークもある。このように、絶滅危惧種と外来種問題が同時に見られる佐賀平野の水辺について、その現状と課題を水草を中心に紹介したい。